

# 地域人材に望むこと

## —ジュニアスポーツの指導者研究から—

東京未来大学こども心理学部 教授 藤後悦子

### 1 なぜいま「部活動指導員」なのか。

当たり前のように学校に存在する「部活動」ですが、これは世界から見ると非常に特殊なものです。NHKのBS番組「クールジャパン」では2016年に日本の部活動が取り上げられ、身近な学校に若者が年間通して熱中できる活動があることや、その種類の多さに、他の国々の人々から驚きと絶賛が生じていました。学校の先生方の中には、「子ども達に部活動を指導するために教員になった」という人も少なくないことと思います。

2022年6月、部活動移行会議の答申として、「運動部活動の地域移行に関する検討会議提言」が取りまとめられました。この数年間で部活動の流れが大きく変わることでしょう。ところで、なぜここにきて部活動の指導員が注目されることとなったのでしょうか。大きく3つの要因が絡んでいると思います。①教員の働き方改革の流れ、②体罰やハラスメントの問題、③指導者の専門性と少子化の問題が挙げられます。本稿では主に②の体罰やハラスメントの問題を中心に取り上げます。

### 2. 部活動指導員がもつ可能性

部活動指導員への期待は大きく、地域移行に向けてすでに多くの実践が試みられています。部活動指導員の前段階として、運動部では多くの学校で「外部指導員」が取り入れられてきました。特に強豪校と言われる部活動が盛んな学校では、野球部、サッカー部、ラグビー部、バスケットボール部、バレーボール部、ダンス部などのチーム競技を中心に外部指導員が定着していました。その他、公立中学校での先駆的事例としては東京都三鷹市の和田中学校、「新時代への部活動」の挑戦として全面的に地域移行を実践している長野県飯田市などが有名です。スポーツ庁（2022）が発行した「運動部活動の地域移行等に関する実践研究事例集」では、地区町村運営型、地域スポーツ運営型などに分かれて地域移行を担う核となるシステムが検討されています。地域人材が部活動に係わることで、生徒にとって専門的技術の獲得が可能となるだけでなく、多様な人々との出会いや交流により、豊かな人間性を育まれるこ

とが期待されます。また地域人材が部活動指導員となることで、学校でラベリングされた教員との関係や友人関係などに風穴を通すこともできるかもしれません。教員側の視点からも、今まで部活動に充てていた時間を「授業準備や授業研究」といった、教員本来の専門性に注力することができます。このように部活動指導員への期待は大きいのです。

### 3. 部活動指導員が抱える課題

前述の通り、部活動指導員の社会的意義は大きいものの、部活動指導員の導入により部活動に内包されていた「ハラスメント」や「勝利至上主義」の問題が全て解決されるとは言い難いのです。地域人材が部活動を主に担うことで、残念ながらこれらの問題を潜在的に加速させてしまうこともありえます。

私たちはジュニアスポーツの分野で主に地域スポーツのハラスメントにまつわる問題を研究してきました。地域スポーツの指導者が、今後学校の部活動指導員として活躍される可能性が高いため研究結果が参考になると思っています。地域スポーツの指導者は、大半がボランティアでコーチを担っています。指導者の方々の「子ども達のために」という「善意」で地域スポーツが成り立っているため、コーチの皆様には頭の下がる思いで一杯です。しかし、同時に「善意」だからこ、その扱いに難しさがあるのです。「善意でやっていた」からこそ、不適切な指導を行っていたとしても、周囲がそれを指摘しづらい面があります。近年指導者は、公認スポーツ指導者などの研修を受けることが推奨されつつありますが、現実に研修を受けているのは一部の指導者にすぎません。学校の教員であれば、少なくとも教育基本法や学校教育法、学習指導要領、子どもの権利条約などを学ぶ機会がありますが、やはり数回の研修だけでは不十分で、長期的な指導者育成の視点が不可欠です。なぜならば知識がある教員でさえ、運動部活動での体罰は根絶できていない現状があるからです。残念ながらこの原稿を執筆している現在、県立船橋高校の体罰のニュースで飛び込んできました。2012年に桜宮高校のバスケットボール部での体罰による自殺事件後、体罰は社会問題化されましたが、体罰根源には程遠い現状です。

身体的暴行のように、一見して体罰としてわかりやすいもの以外にも、子ども達にとって精神的苦痛を与える暴言や無視、悪い噂を流すなどの関係性攻撃もあります。藤後他(2015)が大学生を対象とした研究では、スポーツでのネガティブな経験は中学校時代が最も多く、その内容は「負けると監督が怒って、3時間以上走らされた」「できない子に『のろま』などの罵声をとばしていた」「失敗すると『生きている価値がない』と言われた」などが挙がりました。その他にも強豪校出身のゼミ生に話を聞くと「うまい子は名前と呼ばれるが、他の選手は背番号と呼ばれる」「バスケの試合中ミスすると、試合中のコート内に一人だけ立たされて怒鳴られた」など、次々にエピソードが語られました。また大橋他(2022)がスポーツ系の専門学校生を対象に行った調査では、「「ばか」や「センスがない」など、人格や能力を否定されるような言葉で怒鳴られた経験」は、チームスポーツ経験者の40.1%が「あり」と答えています。

また藤後他(2015)の研究では、指導者自身がスポーツ経験でネガティブな体験をしているほど、「下手な人はチームの足を引っ張っていると思う」「チームについていけない人は、チームをやめたらいい

と思う」などの切り捨てる考え方が強くなっており、指導者のストレスが高いほどハラスメントを行っていることも分かりました（藤後・井梅他，2018）。さらにコーチのハラスメントと選手同士のハラスメントや応援席のハラスメントの関係は強く、ミスへの批判的な雰囲気はお互いに伝播し、そのことで選手はモチベーションが下がったり、神経症的な症状を強めていることも実証されました（藤後他，2017；藤後・大橋他，2018）。

さて、このようなハラスメントは運動部のみに存在するわけではありません。藤後他（2022b）がチームスポーツ、個人スポーツ、文化・芸術の指導者を対象に調査をした結果では、「特定の子どもをかわいがる」（チーム：33.8%、個人：27.8%、文化・芸術：29.4%）、「失敗すると、ためいきや舌打ちをする」（チーム：40.3%、個人：49.5%、文化・芸術：38.9%）、「「ばか」「センスがない」など否定的な言葉を言う」（チーム：27.3%、個人30.9%、文化・芸術：19.8%）などとなりました。文化部でもハラスメントは起こりえます。私が勤務する大学の学園祭で部活動をテーマにシンポジウムを開催しました。学生にも自身の部活動の体験を語ってもらったところ、元吹奏楽部の学生からは、「演奏がうまくいかない、楽譜やタクトを投げつけられた」「メイン楽器のみ、先生やOBからちやほやされる」「ほぼ休みがない練習で、休む時は部員100名の前で理由を言わされる」など、ハラスメントを思わせるような内容が多く語られました。

現在の運動部や文化部（特に音楽系）では、特に強豪校になるほど、指導者は短期間で素晴らしい成果を求められます。学校や親、OBなど多くの関係者も成果を強く望んでいるため、その期待を背負い、知らぬ間に指導者は「勝利至上主義」や「成果主義」に陥りやすくなるのです。地域人材が部活動に係わる場合でも同じ傾向となる可能性は否めません。また地域人材ほど、同じ地域の住民である保護者とも近い距離となります。例えば小学校から地域スポーツでお世話になったコーチが中学で部活動指導員となった場合、親しい親子のみ中学入学前に非公式な部活動体験を用意してもらったり、スタメン決めやチーム戦略に親しい親の意見が反映されたりなど、ひいきにもつながっていきやすいのです。

その他、現場へのヒアリングから得たいくつかのエピソードを紹介します。元プロ選手が高校の部活動の外部講師となった際、顧問や他の指導者の技術力や教え方に対して見下した発言を生徒の前で行い、生徒と顧問との信頼関係を崩した事例。チームがよい成績を得ることができると、自身の手柄のようにSNSに無断で生徒の姿も含めて写真をアップする事例。また練習中も常にスマホばかりいじっていたり、学校内で学校関係者に挨拶をしなかったり、学内の連携を無視したりなど、モラルや倫理観の自覚に乏しい事例なども報告されています。

#### 4. よりよい部活動の運営のために

部活動指導員として部活動に係わるとは、学校職員の一員となることを意味し、子どもにとってモデルとなるべき振る舞いや姿勢が求められます。部活動指導員になるための研修は不可欠ですし、日々子ども達からも学びながら自身の資質向上に努める必要があります。私たちは、子ども達のよりよりスポーツや文化活動の実現を目指し、親向けの書籍「スポーツで生き生き子育て&親育ち（こども環境学会論文・著作奨励賞）（藤後他，2019）、コーチ向けの書籍「ジュニアスポーツコーチに知っておいてほし

いこと」(大橋他, 2018)、そして文化部和運動部を包括した部活動指導員向けの書籍「部活動指導員ガイドブック」基礎編(藤後他, 2020)と応用編(藤後他, 2022a)を執筆しました。これらの書籍で伝えたいことは、スポーツや文化・芸術活動を通して、子ども達の人生を豊かにし、生涯学習や生涯スポーツの視点に立って子ども達の well-being を高めて頂きたいという願いです。そのためには、指導者自身もスポーツや音楽や芸術を楽しんで頂きたいと思っています。その姿こそが、子ども達にとってあこがれを伴ったロールモデルとなるのです。

最後に私たちの研究(藤後他, 2022b)を紹介します。スポーツ庁が提供している子どもの権利条約に基づいた「アセスメントシート」を運動系、文化・芸術系の指導者に実施しました。その結果、指導者のハラスメント抑制に影響を与えたものは、「子ども主体の運営」でした。子ども自身で考え、解決していくような部活動。子ども達が生き生き、ワクワクする部活動をぜひ目指して頂きたいと思います。子ども達の最高の笑顔、今日の活動でありましたか？

## 引用文献

スポーツ庁(2022). 運動部活動の地域移行等に関する 実践研究事例集

[https://www.mext.go.jp/sports/content/221101\\_spt\\_ori para-000025667\\_1.pdf](https://www.mext.go.jp/sports/content/221101_spt_ori para-000025667_1.pdf)

大橋恵・藤後悦子・井梅由美子著(2018). ジュニアスポーツコーチに知っておいてほしいこと 勁草書房

大橋 恵・藤後悦子・井梅 由美子(2022). ジュニアスポーツにおける指導者ハラスメント体験尺度の探索的検討 心理学研究, 93(3), 230-239.

藤後悦子・井梅由美子・大橋 恵(2015). スポーツにおけるポジティブ体験・ネガティブ体験とスポーツ・ハラスメント容認志向 東京未来大学研究紀要, 8, 93-103.

藤後悦子・井梅 由美子・大橋 恵(2017). チームでのネガティブな人的環境が小学生のスポーツモチベーションに与える影響 モチベーション研究, 6, 17-28.

藤後 悦子・井梅 由美子・大橋 恵(2018). 小学生の地域スポーツにおける指導者ハラスメントー指導者の過去のスポーツ経験と現在のストレスー 日本心理学会大会発表論文集, 82, 1A1M-131

藤後悦子・井梅由美子・大橋恵編著(2019). スポーツで生き生き子育て&親育ち：子どもの豊かな未来をつくる親子関係 福村出版

藤後 悦子・大橋 恵・井梅 由美子(2018). 中学校の運動部指導者の関わりが部内の人間関係および生徒の精神的状態に与える影響 社会と調査, 20, 55-66.

藤後悦子・大橋恵・井梅由美子編著(2020). 部活動指導員ガイドブック基礎編 ミネルヴァ書房

藤後悦子・大橋恵・井梅由美子編著(2022a). 部活動指導員ガイドブック応用編 ミネルヴァ書房

藤後悦子・大橋恵・井梅由美子(2022b). 小中学生の課外活動における指導者ハラスメントと子どもの権利条約との関連 こども環境学会 2022 年大会